

適期・適量の穂肥施用で高品質・収量確保

1 中干しと、その後の水管理

- 中山間地でも中干し開始時期を過ぎています。遅植えの圃場も遅れずに中干しを開始し、出穂1ヵ月前には中干しを終了しましょう。
- その後は、浅水の間断かん水から徐々に飽水管理（田面や足跡や溝に水が溜まっている状態）へ移行しましょう。
- 継続的な湛水でワキの発生が多くなっています。天水田等では、降雨による水の入れ替えや、除草機等での中耕によりガス抜きをしましょう。

2 出穂予想と穂肥のめやす(分施肥系) ※6月16日現在 平坦地予想

○本年の出穂期は、早生は平年より1日程度早く、コシヒカリは平年並の予想です。

品 種 名	出穂予想日	穂肥施用時期				2回の合計窒素 成分量(kg/10a)
		1回目	出穂前日数	2回目	出穂前日数	
五 百 万 石	7/21頃	7/1頃	20日	7/9頃	12日	2
つ き あ か り	7/22頃	6/22～27頃	30～25日	7/8頃	14日	3～3.5
こ し い ぶ き	7/24頃	7/1頃	23日	7/10頃	14日	2
こ が ね も ち	7/30頃	7/12～15頃	18～15日	7/20頃	10日	1～3
コ シ ヒ カ リ	8/3頃	7/16～19頃	18～15日	7/24頃	10日	2

※早生品種（五百万石、つきあかり、こしいぶき）は5月上旬に移植した場合を想定

※こがねもち、コシヒカリは稚苗5月10～15日頃、中苗5月15～20日頃に移植した場合を想定

※出穂期は今後の天候等により出穂予想日が前後する場合があります。今後の最新情報を参考にしてください。

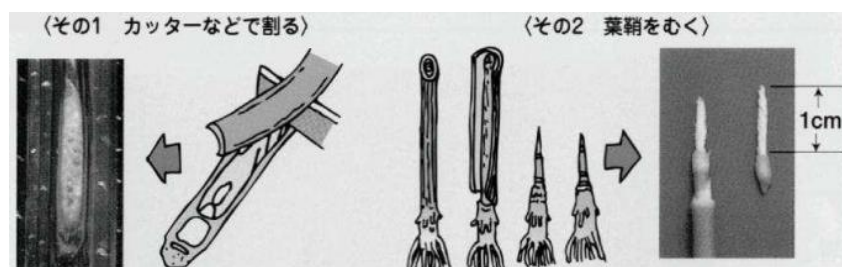
3 穂肥診断のポイント

- 穂肥は、以下の手法で稲の生育診断を行うとともに、天候や病虫害の発生状況及び地力等を総合的に判断して決めましょう。
- 穂肥施用時は浅めに湛水し、その後は飽水管理を継続しましょう。

(1) 穂肥診断の手順

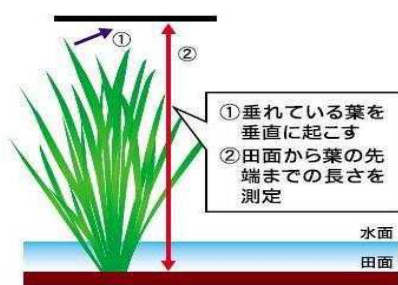
- ① 幼穂長を測り出穂前日数を判断する。

【幼穂長と出穂前日数のめやす】

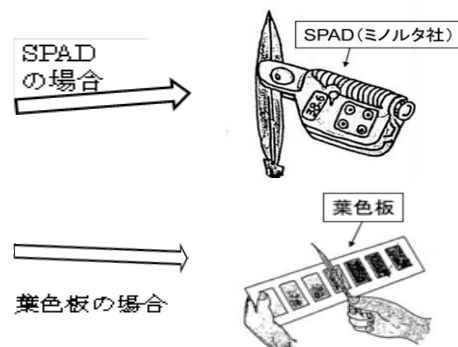
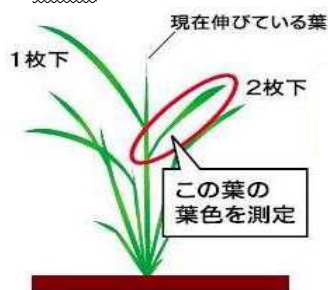


幼穂長(cm)	出穂前日数
0.02	30日
0.1	24日
0.2	20日
0.5～1.0	18日
4.0～6.0	12日
10.0～12.0	10日

- ② 草丈を測る。



- ③ 葉色(単葉)を測る。



(2) コシヒカリの穂肥診断 ～診断結果を基に、施用時期及び施用量を判断しましょう。～

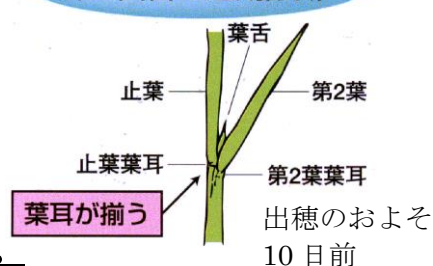
【1回目の穂肥:幼穂形成期(出穂 24 日前頃) の生育による診断】

草丈 \ 葉色(単葉)	SPAD 値 : 34～32 又は 葉色板 : 4.2～3.9	SPAD 値 : 35 以上 又は 葉色板 : 4.4 以上
70～75 cm以内	施用時期・施用量とも基準どおり ■出穂 18 日前に 1.0kg/10a	施用時期を遅らせる ■出穂 15 日前に 1.0kg/10a
75～80 cm以内	施用量を減らす ■出穂 18 日前に 0.5～0.8kg/10a	施用時期を遅らせ、施用量を減らす ■出穂 15 日前に 0.5～0.8kg/10a
80 cm以上	施用できない	施用できない

【2回目の穂肥:出穂 12 日前頃の葉色による診断】

出穂 14 日～12 日前の葉色	出穂 10 日前の施用量 (10a 当たり)
SPAD 値 : 34～32 又は 葉色板 : 4.5～4.2	基準量どおり施用する 1.0～1.5kg/10a
SPAD 値 : 35 以上 又は 葉色板 : 4.6 以上	施用量を減らす 0.7～1.0kg/10a 未満

第2回目の適期診断



○ 2回目穂肥は、後期栄養維持のため確実に施用しましょう。

(3) こしいぶきの穂肥診断～1 回目の穂肥は草丈・葉色から判断し、2 回目の穂肥は確実に施用～

【1回目の穂肥:幼穂形成期(出穂 24 日前頃) の生育による診断】 ※葉色の数値は参考値

草丈 \ 葉色(単葉)	SPAD 値 : 36 以下 又は 葉色板 : 4.6 以下	SPAD 値 : 37 以上 又は 葉色板 : 4.7 以上
60 cm未満	施用時期・施用量とも基準どおり ■出穂 23 日前に 1.0kg/10a	施用時期を遅らせる ■出穂 20～18 日前に 1.0kg/10a
60 cm以上	施用量を減らす ■出穂 23 日前に 0.8kg/10a 程度	施用時期を遅らせ、施用量を減らす ■出穂 20～18 日前に 0.8～1.0kg/10a

【2回目の穂肥】

- 施用時期: 出穂 14 日前
- 施 用 量: 1.0kg/10a (※低地力ほ場や後期栄養の不足が懸念される場合は、1.5kg/10a 施用)

4 病虫害防除

(1)いもち病

○生育量が大きく葉色が濃いほ場や、過去に発生が見られたほ場では、こまめに確認を行い、早期発見・早期防除に努めましょう。

(2)斑点米カメムシ類

- 予察調査の結果、今年もカメムシ類の発生が確認されており、斑点米の発生が懸念されます。
- 例年、中山間地を中心に斑点米カメムシ類による被害が発生しています。出穂前に農道・畦畔の草刈りと本田防除を徹底しましょう。
- 水田内の雑草(ノビエ、ホタルイ)は、斑点米カメムシ類を誘引し、その増殖を助長するため除草を徹底しましょう。

(3)紋枯病

○出穂後に高温にあいやすい早生品種や、株間の風通しが悪い圃場などに発生しやすいので注意が必要です。特に前年に多発した圃場では、今年も多発するおそれがあるため特に注意しましょう。